第30回五輪競技大会（2012/ロンドン）に日本代表選手団員として参加

スポーツ政策も国家戦略の時代

寄稿

久木留　毅
文学部准教授

医・科学・情報を駆使した戦いに

重要度増す

ナショナルトレーニングセンター

メダル獲得増に村外拠点が貢献

▶前文部科学副大臣、文部科学審議官らと

２０４カ国・地域のトップアスリート約１万５００人（日本選手２９３人）が、26競技３０２種目で戦いを繰り広げたロンドン五輪。同大会に情報戦略スタッフとして参加した久木留毅文学部准教授に、各国で展開中のスポーツ医・科学・情報面のサポートを報告していただいた。

■情報戦略スタッフとは

我々は、情報戦略を「意志決定者が正しい、理にかなった判断・決断をするために『情報』を収集・加工・分析・評価し、提供すること」と定義付けしている。私が部門長を務める日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）情報戦略部門は、五輪の前・中・後において強豪国のさまざまな情報を収集・加工・分析・評価した上で戦略を立案し推進する役割を担っている。

今大会、私は情報戦略チームの一員として日本選手団本部に所属した。情報戦略スタッフとして参加した国際総合競技大会（五輪、アジア大会など）は、これで６回目となった（２００８年北京五輪、04年アテネ五輪）、02年、06年、10年のアジア競技大会）。

オリンピックは、参加するアスリートにとって最高の舞台であるとともに、国と地域のナショナル五輪委員会（ＮＯＣ）が一堂に会する場。さらに政治、経済、文化を含めた国際交流の場でもある。

大会期間中に滞在した選手村には２０４のＮＯＣスタッフがいるため、多くの情報を一度に収集することができる。私の役割は、競技に関する日本代表チームと世界の強豪国の動向を上層部に報告することと、選手村において各ＮＯＣを訪問し視察とミーティングを実施しさまざまな周辺情報の収集・加工を行うことであった。

■ロンドン五輪の成績から見えるもの

開催国であるイギリスは今大会、強豪国ロシアをおさえ、金メダル獲得数で初めて総合3位に入った。日本は13競技（前北京大会は８競技）で史上最高のメダル総数38個を獲得した（表参照）。

今大会におけるイギリスの好成績の要因は、地元の利を生かしたことは言うまでもないが、１９９６年アトランタ五輪以後に中・長期的な視点に立ったスポーツ政策を打ち出したことであろう。ロンドン五輪の招致成功後には「Mission２０１２」を策定し、厳格なスポーツ評価システムの導入により金メダル獲得数で北京大会4位、ロンドン大会3位という結果を残した。これらイギリスの試みは、用意周到な中・長期戦略を持つ重要性を示唆している。また、特筆すべきは、このスポーツ政策を具現化するにあたり、イギリス政府が「ＵＫ Sport」というエリートスポーツの予算執行組織を設置したことである。「ＵＫ Sport」は、予算の管理、評価、配分、アドバイス等を行う組織である。

オリンピックにおける戦いは、ますます繰り返し高速化、高難度化、そして高強度化が進んでいる。その中でスポーツ医・科学・情報の役割も重要となっている。

現在、アメリカ、中国、イギリスなど、スポーツの強豪国において、ナショナルトレーニングセンター（ＮＴＣ）を持たない国はない。今大会メダル獲得数第1位のアメリカは、コロラドスプリングスをはじめとして３つのＮＴＣがあり、その中に医・科学・情報面でのサポートも整っている。フランスでは、パリ郊外に国立体育・スポーツ研究センター（ＩＮＳＥＰ）が設立され、トレーニングとスポーツ医・科学・情報の拠点となっている。オーストラリアでは、１９８１年キャンベラにオーストラリア国立スポーツ研究所（ＡＩＳ）が設立され、アスリートがプロとして所属し国の支援を受けている。また、施設のリニューアルも行われリオデジャネイロを見据えた強化が進んでいる。

韓国は、既存のＮＴＣのほかに、チンチョンに約３８０億円を掛け、新たな広大な施設を整備している。また、今大会で金メダル獲得数世界3位となり一躍世界の強豪国の仲間入りをしたイギリスは、スポーツにおける先進国を目指し国家戦略としてスポーツ政策を展開し、大学、企業等との連携も含めてスポーツ医・科学・情報の手厚いサポート体制が整えられている。

同様の施設を設置した。

日本も今大会初めて諸外国と同様の村外拠点をマルチサポート・ハウス（ＭＳＨ）という名で設置した。そのコンセプトは、情報戦略・医・科学サポートの「ワンストップショップ」と位置づけられていた。ＭＳＨでは、分析（映像フィードバック、映像編集、簡易動作分析、結果集積・分析）、コンディショニング／リカバリー（栄養補給、メディカルスペース、リカバリープール、トレーニング、心理サポート）、情報戦略（戦況分析・調査、日本選手団との連携・調整、現地―日本の連携・調整）、コミュニケーション／機器保管、について一度にできる点が特徴的であった。

■マルチサポート・ハウス

今大会の特徴の一つとして、選手村近郊にスポーツ医・科学・情報のサポート拠点が複数の国で設置された。アメリカは、２０００年のシドニー大会からハイパフォーマンスセンターを設置している。今大会では、東ロンドン大学内に中心拠点を置くとともにそのほか4つの競技場に隣接した拠点も設置した。オーストラリアは、前大会同様にリカバリーセンターを設置した。そのほか、オランダ、韓国、イギリス、シンガポールなどが代表選手団における利用総数は４２１７人、一人の選手の平均利用回数６・７回という利用状況であり、38個のメダル獲得に情報戦略・医・科学サポートの面から支援を行った。

ＭＳＨは、五輪開幕前の7月14日から8月12日までオープンした。日本

〈表〉メダル獲得数各国順位

金メダル獲得順位	国	金	銀	銅	計	総メダル獲得順位
1	アメリカ	46	29	29	104	1
2	中国	38	27	22	87	2
3	イギリス	29	17	19	65	4
4	ロシア	24	25	33	82	3
5	韓国	13	8	7	28	9
6	ドイツ	11	19	14	44	5
6	フランス	11	11	12	34	8
8	イタリア	8	9	11	28	9
8	ハンガリー	8	4	5	17	14
10	オーストラリア	7	16	12	35	7
10	日本	7	14	17	38	6
22	ブラジル	3	5	9	17	14

「ソチ」「リオ」に向けて

新たなメダル獲得競技種目選定を

ロンドン五輪を振り返ると、世界の競技力はさらに高いレベルで拮抗し、わずかな差を求めより医学、科学、情報を駆使した戦いとなっている。一方、開会式へ国家元首が約１００人も参加することから外交の場としての位置づけも重要となり、国家戦略としてスポーツ政策を展開する時代になっている点にも注目する必要がある。

14年ソチ大会、16年リオデジャネイロ大会（夏季）の五輪において日本が世界の中でメダル獲得数において上位に入るためには、重点強化競技種目の明確化と新たなメダル獲得競技種目の選定をすることが重要である。そのためには、ロンドン五輪で得た各国のさまざまな情報を的確に分析・評価し、戦略を立案する必要がある。すでにソチ、リオデジャネイロ五輪に向けた戦いは始まっている。

……

（くきどめ・たけし）博士（スポーツ医学）日本五輪委員会情報・医・科学専門部会部会委員、日本レスリング協会強化委員会委員ほか。本学レスリング部コーチ。

メダリストが子どもたちに五輪報告

「専修大学少年少女レスリング教室」

ロンドン五輪レスリングメダリストらが9月13日、生田キャンパスを訪問。レスリング道場で開催中の社会体育研究所主催の地域貢献活動「専修大学少年少女レスリング教室」（木村元彦監督＝二部事務課）の子どもたちに〝五輪報告〟をした。

一行はフリースタイル男子66㌔級・米満達弘、同女子48㌔級・小原日登美、同女子63㌔級・伊調馨（以上金メダル獲得）、グレコローマン男子60㌔級・松本隆太郎、フリースタイル同55㌔級・湯元進一（以上銅メダル獲得）ら10選手＝敬称略。

佐藤満同五輪チームリーダー（経営学部教授）に紹介され選手一人ひとりがあいさつ。集まった100人を前にレスリングの実践や指導を行った。

▶メダリストらが勢ぞろい

▶小原選手にサインをもらう子どもたち